

村松先生のご退官に寄せて

加賀美 常美代

村松先生との最初の出会いは、お茶大留学生センターの二次審査の面接の時がはじめてでした。面接では、心臓が止まりそうな私に、最初に村松先生が口火を切ってご質問をしてくださいました。内容については、留学生相談と日本語教育に関する微妙な論点であり、最初から衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えております。その後、縁あってお茶大に赴任することになり、2001年の10月以来、2年あまりの貴重なお付き合いでした。

留学生センターという新しい組織の立ち上げで、私たち教員は、連日、さまざまな会議や打ち合わせに翻弄されておりました。そういう中で、村松先生は多くのとりまとめや調整をお引き受けくださいました。大学人として、研究・教育活動が重要なことは当たり前ですが、新組織の立ち上げに際しては、運営面での舵取りや他組織との調整が非常に重要なことを先生は私たちに身をもって教えてくださいました。そして、このことに、村松先生が多くの時間を割いてくださりご尽力をくださったことは、先生がご退官された後、教員一同がつくづく感謝していることでもあります。

個人的には、先生の研究室は私の研究室のお隣で、三重大学から赴任したばかりでお茶大のことをよく知らない私にいろいろとご助言を下さるなど、公私共にお世話になりました。留学生たちにも先生はたいへん人気があり、「かわいい」(?)というご評判でした。特に、留学生懇談会では、教員たちは相談室チューターの人たちに1時間ほどダンスや盆踊り教えてもらい、下手なダンスを学生たちの前で披露するのですが、先生のダンスの人気は抜群でした。普段の先生の授業を私は存じ上げませんが、授業でもダンディでハンサムでユーモアのある先生は、学生にこよなく愛されていたのだと思います。

もう一つのエピソードとして、ピアサポートプログラム主催の先生のご講演があります。実は、文教育学部のピアサポートプログラムを立ち上げた初年度に、学生にキャリア意識を持ってもらおうということで、先生に「私がアナウンサーだった時」という題で、ご講演をしていただきました。そのときに、先生の若かりし頃の話、ご専門領域の話など大変豊かなご経験を楽しく学生と共にお聞きすることができ、先生の長いキャリアとお人柄を肌で感じさせていただきました。日々の職務に追われている中で、多様なご経験や先生のご研究、教育実践などのお話を充分、お聞きする機会やゆとりがない私たち教員の現状を

振り返り、愕然といたしましたことを今でも覚えています。

先生がご退官された今、先生のご専門領域について多くのことを学ぶ機会を逸してしまっただけでなく、いろいろなお話をゆっくりできなかつたという後悔の思いはいまだに消えておりません。また、日本語教育コースにおいても音声コミュニケーションという重要な領域をご担当された先生が去られてしまわれた今、私たちの喪失感は筆舌に尽くしがたいことです。

先生の新たなスタートは、たぶん「自己実現」という言葉がもっともふさわしいのではないかと思います。先生にお世話になったこれまでの感謝と共に、あらたな人生の歩みが先生にとってすばらしいものでありますよう、心よりお祈り申し上げます。